

第4章 各教科等における具体的な取組

1 国語科

(1) 国語科における言語活動の充実の視点

ア 国語科における「言語活動の充実」のとらえ方

国語科における「言語活動の充実」のとらえ方は、p.5の表1のとおりであるが、次のような点を考慮しながら、言語活動を見直したり、計画したりして、児童生徒に、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けさせていくことが大切である。

- 1 これまでの言語活動が「活動あって学びなし」の活動になっていなかったかなど課題を整理する。
- 2 各教科等との関連を図ることをより重視する。
- 3 生きてはたらく国語の能力を育成するということを意識した言語活動を計画する。
- 4 学校や児童生徒の実態に応じて、言語を通じた具体的な学習活動を工夫する。

イ 言語活動の充実を図る視点

(ア) 言語活動を具体化する際の要素の明確化

言語活動を具体化するには、図5のような四つの要素を考慮する必要がある。すなわち、どのような力を身に付けさせるために、どのような状況にある児童生徒に、どのような教材の特性を生かして、どのような効果が期待できる言語活動を行えばよいか十分に検討した上で計画することが重要である。

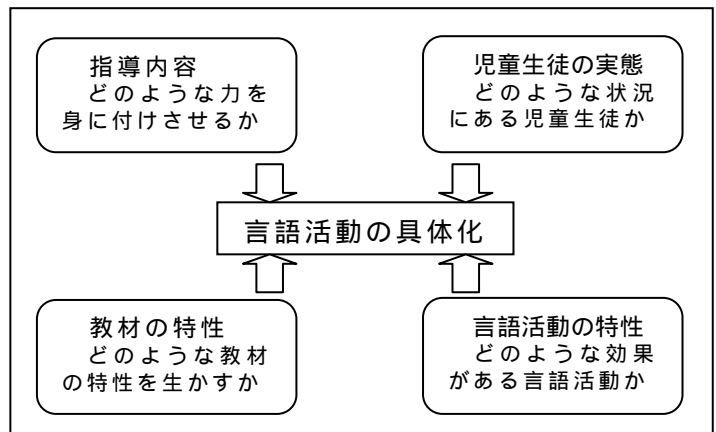


図5 言語活動を具体化する際の要素

(イ) 本県における国語科の言語活動の現状

言語活動の取組に関する実態調査の結果(図6)を見ると、問5・6の「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の活動については、他と比べて取組が不十分であるといえる。自分の考えを論理的に話したり、書いたり、互いの意見を交流し考えを広げたり深めたりする

問	質問項目(以下の活動を行っているか) 4...とてもあてはまる 3...ややあてはまる	4と3の合計(%)			
		小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
1	日常生活の中で感じたことを、作文・詩歌などで表現する活動	90	84	79	79
2	書かれている内容を正確に読み取り、発表する活動	95	91	82	60
3	筆者の意図を読み取り、まとめたり、表現に生かしたりする活動	93	93	86	46
4	文章を読み、自分の知識や体験に照らし合わせて、自分の考えをまとめる活動	84	82	79	53
5	課題設定、取材、構成、推敲、交流の過程を経て、書く活動	80	73	58	46
6	テーマを決めて討論するなど、自分の考えや集団の考えを発展させる活動	61	55	24	26

図6 言語活動の取組に関する実態調査結果

ことは、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために重要な学習活動であり、今後、「読むこと」領域との関連も図りながら進めることが必要である。

(ウ) 言語活動の年間指導計画への位置付け

どの単元で、どの言語活動例を生かした学習が考えられるか、表4のような「単元と言語活動例との関連一覧表(例)」を作成するなどして検討し、言語活動を年間指導計画に位置付け、意図的・計画的に進めていくことが大切である。

表4 小学校第1学年 単元と言語活動例との関連一覧表(例) * A B Cは領域

月	単元名「教材名」	言語活動例
9	はっきりはなそう「みんなに知らせたいこと」	Aア Bエ
	みんなでよもう「大きなかぶ」	Cアイ
	かんじでかこう「かずとかんじ」	
	くらべてよもう「じどう車くらべ」	Cウ Bウ
10	こえにだしてよもう「くじらぐも」	Cアイ
	たのしくつかおう「かんじのはなし」	

(2) 言語活動の充実を図る学習指導の工夫

ア 言語活動を具体化する手順

学習のねらいの達成につながる効果的な言語活動を行うために、次のような基本的な手順を踏まえて計画を立てる必要がある。なお、このステップ1～6は固定的なものではない。先に述べた言語活動を具体化する際に考慮すべき四つの要素を踏まえた上であれば、ステップの順序を弾力的に捉えて具体化することも考えられる。

ステップ1 単元で指導する指導事項の確認
年間指導計画から、単元で指導する指導事項を確認する。 学習指導要領の指導事項と単元の学習のねらいとの関連を明確にし、単元の目標を設定する。
ステップ2 身に付けさせたい力の具体化と重点化
指導事項を分析し、具体的にどのような力を身に付けさせる必要があるのか(どのようなことができる、分かるようになればよいのか)を明確にする。 本単元で重点的に指導する内容を決める。
ステップ3 児童生徒の実態の把握
学習に対する関心・意欲・態度について把握する。 身に付いている(いない)言語能力を把握する。 これまで行ってきた言語活動の経験を把握する。
ステップ4 教材の分析と補助教材・資料・教具等の選定
教科書教材を中心に学習の目標達成に適切な教材を選定する。 教材文の分析を行い、その特性を把握する。 学習の効果をあげる補助教材・資料・教具等の選定を行う。
ステップ5 効果的な言語活動の設定
言語活動例の具体化を図る。児童生徒の実態に応じて、例示された活動以外の言語活動も工夫する。 どのような言語活動が「身に付けさせたい力」につながるか検討する。
ステップ6 指導計画の作成
ステップ5までの内容を基に、単元の指導計画を作成する。 指導計画を基に、1単位時間の学習計画を立てる。 学習に必要なワークシートの作成や発問、板書の計画を立てる。

イ 学習過程の各段階における言語活動の在り方と具体化

新学習指導要領では、言語活動を通して、内容(1)の指導事項を身に付けさせるということを明確にするために、言語活動例を内容(2)に示している。単元の学習計画を立てる際には、単元を貫き学習課題を解決する言語活動を設定することが大切である。しかし、学習のねらいを達成するためには、単元の学習過程の各段階で、単元を貫く言語活動を支える言語活動を工夫しなければならない。表5は「読むこと」領域における文学的な文章の学習過程と各段階における言語活動のねらい、具体的な言語活動の例を示したものである。このような工夫をすることで、児童生徒が学習過程の各段階で学習に対する必然性をもって意欲的に取り組み、「自ら考え判断し、表現できる力」をはぐくむことにつながると考える。

なお、例えば、「読むこと」領域の学習において、話したり書いたりする活動を行うことも考えられるが、それらは「読む能力」の育成を目指して行うものであり、そのことを踏まえて言語活動を工夫する必要があることを留意したい。

表5 学習過程に沿った言語活動のねらいと言語活動の例（文学的な文章）

過程	言語活動のねらい	具体的な言語活動（例）
つなぐ	これまでに学習したことを振り返り、これからの学習に関連付けること	これまでに文学的な文章で学習した内容を発表し合う これまでに文学的な文章で学習した方法を発表し合う など
つかむ	どのような課題をもって学習を進めたらよいかを考えて学習課題をつかむこと	読み聞かせを聞く これまでに読んだ文学的文章と比べて読む 初発の感想を書く 場面分けを行う など
見通す	どのような流れで学習を行っていくか学習計画を立てたり、読みの視点を明らかにしたりすること	設定した学習課題に即して題名読みをする 学習課題について予想し、その内容を文章にまとめる など
調べる	課題解決に向けて、調べ読みする過程において、観点を明確にして読むこと、根拠を明らかにして読むことや考えを整理して読むこと	文章に描かれたことに関することを調べて書き込みをしたり、吹き出しに書いたりする 心情曲線・人物相関図をかく 視点を変えてリライトする など
交流する	それぞれが読み取ったことを交流し、自分の考えを広げたり、深めたりすること	考えたことについて話し合う 動作化や役割演技を行う ペープサートを行う 役割音読や群読を行う 発表の感想を述べ合う など
振り返る	学習で身に付けた基礎的・基本的な知識・技能をまとめたり、整理したりすること 学習課題が解決したことを確認すること	基礎的・基本的事項を記録する 読み取ったことを踏まえてまとめの文章を書く まとめの文章を読み合う まとめの音読（朗読）をする など
生かす	学習を通して獲得した自分の言語能力を生かして、実際に伝え合うこと	登場人物に手紙を書く 続き話や推薦文、書評を書く 読書会や音読（朗読）発表会を開く 今回学習したテーマについてディスカッションする など

(3) 言語活動の充実を図る学習指導の実践例

ア 小学校における実践例（五つの言語意識を重視した言語活動の実践例）

(ア) 単元名 伝え合って考えよう「ポスターセッションで伝える」(第5学年)

(イ) 本時の目標(9/15)

自分の伝えたいことが聞き手に伝わるような話し方について考え、工夫しながら話すことができる。

(ウ) 言語活動の充実の視点

よりよい話し方をするための必要条件を話し合わせたり、相互に評価させたりすることによって、評価の観点と基準を明確にして自分の発表を練り上げさせる。

(I) 本時の展開

過程	主な学習活動	時間形態	指導上の留意点 言語活動の充実の工夫
つかむ	1 前時の学習を想起する。 2 学習課題を確認する。 3 評価の観点と基準を話し合う。 4 班で発表の練習(一人につき、発表2分と意見交換3分)をする。 5 よりよい話し方になるように個人で発表の練習をする。	7 一斉	<ul style="list-style-type: none"> 五つの言語意識(相手意識・目的意識・場面意識・方法意識・評価意識)を意識させる。 評価の観点(姿勢と動作、表情と視線、発音と声量、速さと間、気持ちの込め方)と、その基準について話し合わせる。
追究する	6 学習を振り返る。 7 次時の学習を確認する。	30 班 個別	<ul style="list-style-type: none"> 4人の班で、リーダーを中心に発表の練習をさせる。 評価カードに記入させ、カードを基にして相互にアドバイスさせる。 アドバイスされたことに気を付けて練習させる。
まとめる	6 学習を振り返る。 7 次時の学習を確認する。	8 一斉	自己評価カードに本時の評価をさせ、感想や友達からのアドバイスも書き込ませる。 <ul style="list-style-type: none"> 発表や意見交換を通して取り組んだことよかった点を話すことで、意識を高め、次時へとつなげる。 次時は実際にポスターセッションを開くことを意識させる。



【ポスターの作品例】



【班の発表の様子】

(オ) 成果と課題

評価の観点と基準を児童に意識させて評価カードに書かせたことで、アドバイスを生かした発表の練習を効果的に行うことができた。

分かりやすく伝えるためには、話し方と話す内容のつながりを意識させながら指導する必要がある。

イ 中学校における実践例（教材の特性を生かした言語活動の実践）

(ア) 単元名 自然と人間のかかわりを考えよう「松と杉」（第3学年）

(イ) 単元の目標

対比を用いた論理の展開の仕方をとらえ，筆者の主張を理解する。

(ウ) 言語活動の充実の視点

本教材は，図7のように序論と結論の記述がない本論だけの構成となっており，「松と杉」に関する記述を対比して読むことで，筆者の主張を読み取り，適切な序論と結論を書き加える言語活動を設定した。

結論 (なし)	本論		序論 (なし)
	本論	本論	
筆者の主張 まとめ など	問題点 現状 特徴	問題点 現状 特徴	話題提示

(I) 指導計画（全7時間）

図7 教材「松と杉」の構成

時	主な学習活動
1	全文を通読して，大まかに内容をつかむ。 対比して読むとはどういうことかを理解する。
2	「松」「杉」についての内容をとらえる。
3	示された観点に基づいて，「松と杉の対比表」に松と杉に関する記述を書き入れる。
4	それぞれの問題点を押さえる。
5	説明的な文章の三段構成とそれぞれの役割を理解する。 資料「カブトガニを守る」から，説明的な文章の構成（序論・本論・結論）とそれぞれの役割を確認する。 本文の構成をとらえる。 序論の部分を考えて書く。
6	<p>1 本時の学習課題を確認する。</p> <p>松と杉の対比を通して筆者が主張していることをとらえ，結論部分を書こう。</p> <p>2 結論部分の書き方を確認する。</p> <p>3 対比表を基に，結論部分を考える。 (1) 対比表を基にまとめの根拠となる共通点を考える。 (2) まとめの部分と主張の部分の2段落で，8行から10行（約200字）で書く。</p> <p>4 まとめと筆者の主張を文章化し，結論部分を書く。 (1) 書き出しの言葉（接続語）を考える。 (2) まとめ部分と主張部分の2段落で，8行から10行（約200字）で書く。</p> <p>5 書いた結論部分を発表し，結論としてまとめられているか交流する。</p> <p>6 発表を基に，筆者の主張を確認する。</p> <p>7 本時の学習のまとめをし，自己評価をする。</p>
7	自然と人間のかかわりについて考える。 他の資料と読み比べる。 自然と人間のかかわりについて，自分の考えを書く。



【対比表を基に共通点を探す様子】

(オ) 成果と課題

対比を用いた論理の展開の仕方をとらえ，筆者の主張について理解したことを基に，序論と結論を書き加えるという言語活動を取り入れたことで，生徒が主体的に学習に取り組み，説明的な文章の構成についても理解が深まった。

内容の理解が十分でない場合結論が導き出せないため，内容を読み取る力をより磨いていくことが必要である。

